

## 夢に向かつて

福島県福島市立渡利中学校

三年 佐藤 陽 菜

「医師になりたい!」

この気持ちは誰よりも強く、決して消えることのない夢だ。

それは小学五年生から中学三年生の頃までの主治医の先生が女性だったことがきっかけだ。診察してくれる姿を見て、「かつこいい。女性でもなれるんだ。」と思った。

私は「普通ではない人生」を歩んできた。生後間もない頃に食物アレルギーを発症し、小麦が全く食べられない生活が始まった。三歳の時には、アトピー性皮膚炎になり、さらにぜんそくも発症してしまったため、病院に通うことが多くなった。アトピー性皮膚炎は肌がかゆくてかいてしまうため、服では隠せないところはまだ「じゅくじゅくしたポツポツ」の湿疹がある。特に睡眠中は、いつの間にかかいてしまうことが多い。自分は、かきたくないのに自分ではない人がかいているようなのだ。「なんで、こうなってしまうのだろう。」という気持ちが募った。小学生になると肌のことを友達にどう思われるか不安だった。小学一年生の時、体育の授業で跳び箱をしていた。「ドンッ!」と手をつき、飛んだ瞬間「あっ!」と危険を感じた。そのまま顔からマット

に落ちて、口を切った。あまりに驚いて何があったかわからなかった。

あとから、違うクラスの男の子二人が私のことを後ろから押したと知った。理由は「肌がポツポツしていてみんなと違うから。」だったそうだ。今、考えるとなんて理不尽な話なのだろうと思う。私の不安は、現実になってしまったのだ。

これが「みんなの本当の思いなんだ。」と受け止めた。だけど、言葉にどう表したらいいのか分からないくらい辛かった。反発したくても気が弱くてできなかつた。

食物アレルギーも辛かった。食物アレルギーは、みんなに見えないから話してもらえないう部分があった。学校の給食は、みんなと違う除去食が運ばれてきた。さらに友達には「なんで違うの?」と言われた。何気ない一言だったと思う。でも、その一言がいつも心にグサグサ刺さった。

このようなことがたびたびあり、どんどん引つ込み思案な性格になった。肌を隠し、静かにしていることが自分やみんなのためであり、人を傷つけないのだと思っていた。

小学校高学年になると、肌が少し改善し、みんなから嫌な言葉も言われなくなった。そのおかげで、少し明るい性格になった。これは、私が前向きになれるように治す方法を考え、努力してくれた病院の先生方のおかげだと思った。そして、「自分もそんな医師になりたい」と、気持ちは尊敬から目標に変わった。その時に明るく振る舞える性格になり、「みんなに自分のことを知ってもらわなければならない。そして、理解してくれたのかもしれない。」と思った。今では友達に言われて辛かった言葉も「医師になりたい!」という気持ちのパワーに変わっている。そして、人一倍相手のことを考えて発言したり、行

動ができるようになった。

私は、今、福島県立医科大学附属病院に入院している。アトピー性皮膚炎の入院のためだ。私のアトピー性皮膚炎はかなり重度だ。普通は汗をかきやすい肘の内側や膝の裏に症状が出たり、全体的に乾燥している人が多いと思う。その一般的な症状とは違い「ボコボコ」した湿疹が体中であり、治りが悪い。普段、勉強していてもかゆいのが気になり、集中できない。集中するために塾に自習をしに行っても、帰ってくるとかゆみが増して心も体も辛かった。「かゆくなくなれば、集中できるのに。」いつも思っていた。今回は、それを強い飲み薬と塗り薬で治そうと試みている。

入院生活で気づいたことがいくつかある。私の隣の部屋の女性が明日、手術するらしい。その女性は、手術が不安だと口にしていて。看護師さんが気にかけて、夕方に女性の所に来た。趣味の話で盛り上がり、女性も楽しそうにしていた。最後に「明日頑張つてね。手術が終わったら、一緒にリハビリするからね。」と言って帰っていった。

「さすがだ。」と感動した。患者一人一人に気を配り、不安を取り除くことが大切なんだと思った。他にも一人一人の「名前」を呼んでくれることに驚いた。これは医師も同じだ。こんな病院の姿に心を打たれ、もっと医師になりたい。

しかし、私は、もっとたくさん勉強しなければ医師への道は開かれない。勉強しながら、病気を全て治し、「私は辛い思いをしてきたけれど、ここまで治るよ。」と患者さんやその家族に勇気や希望を与えたい。そして、私も患者さん一人一人に寄り添って、人を笑顔にできる最高の医師になりたい。